

加賀・梯川の水と小松天満宮とのかかわりに関する史的考察

金沢工業大学 正会員 中 川 武 夫

A Historical Study on Interaction between the Water flowing
in the Kakehashi River and the Komatsu-tenmangu Shrine

by

T. NAKAGAWA

Abstract

A historical study on interaction between the water flowing in the Kakehashi river and the Komatsu-tenmangu shrine has been made. The Komatsu-tenmangu shrine was founded by the third dynast of Kaga-clan, Toshitsune Maeda in 1657 and was designated as a national important cultural property in 1961. This shrine is located at the water edge of the Kakehashi river. Recently, it has become clear that the location of the Komatsu-tenmangu shrine was determined on the basis of principles of the positive and negative, and the five natural elements, which originate in China. It is found that the ideal interaction between the water flowing in the Kakehashi river and the Komatsu-tenmangu shrine was hampered to some extent by the embankment works in 1936, but is still maintained. After a series of riparian works of the Kakehashi river in 1943, the Komatsu-tenmangu shrine never suffers from any flood due to the break on the embankment of the Kakehashi river, but experiences several floods of the tributary rivers, agricultural channels or drainage canals. An effective measure to improve the present state of interaction between the water flowing in the Kakehashi river and the Komatsu-tenmangu shrine has been introduced and discussed.

[Key words: River, Cultural property, Environment]

1. はじめに

梯川は図1に示したように石川県小松市の鈴ヶ岳(標高1,074m)に発し、山狭を北上し、右から西俣川、郷谷川、光谷川、淳上川を合わせ中海付近で平野部に出る。平野部に出てからは左方へ迂回・曲流しつつ、右から仏大寺川、鍋谷川、八丁川を合わせたのち国の重要文化財である小松天満宮を右に見ながら小松市街地北部を西方に流れる。さらに梯川は左から木場潟に発する前川を合わせ、義経・弁慶・富樫の勧進帳で有名な安宅岡址を左に見ながら日本海に注ぐ流域面積271.2km²、流路延長42kmの河川である。また、梯川は鍋谷川との合流点から河口までの平均河床勾配が3500分の1程度の典型的な緩流河川である。大正時代以前の梯川は図2からも想像できるように加賀平野南部の低湿地を縦横無尽に動きまわる水の龍のような蛇行河川であり、小松天満宮はこの龍のつぼにあたるところに鎮座していた。

ところで、小松天満宮は1657(明暦3)年、

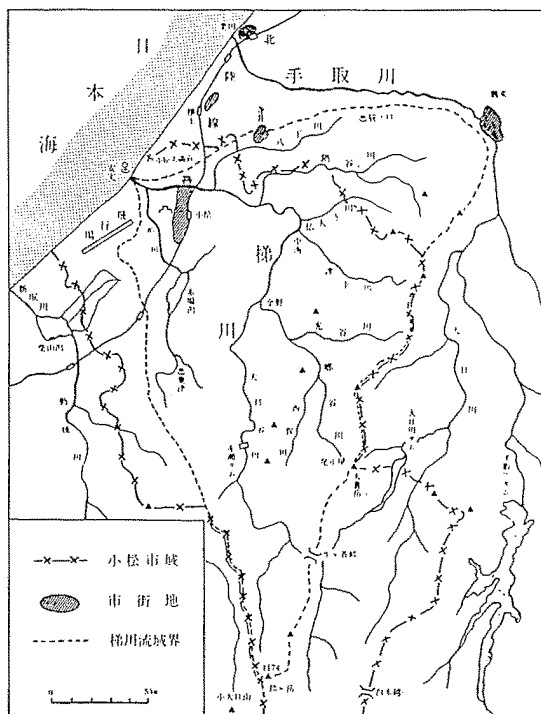


図1. 梯川流域図
(加賀小松天満宮と梯川, (1986年)より抜粋)



図2. 小松駅（1888（明治21）年、金沢市立図書館蔵に加筆修正）

加賀三代藩主前田利常公によって創建され、1651（昭和36）年に国の重要文化財に指定された由緒のある天神社¹⁾である。

本論文の主な目的は、梯川の水とそのほとりに鎮座している小松天満宮とのかかわりを史的に考察することである。

2. 小松天満宮社地選定の由来

小松城は「浮城」とも呼ばれていたように梯川の水によって守られていた城である。黒岩は小松天満宮が小松城の良^{うしろ}（東北）すなわち鬼門の方位に建てられた理由を陰陽五行説を用いて次のように説明した。ここで、陰陽五行説とは良く知られているように中国にその起源を有する古来われわれ日本人の生活の中に深く根をおろしてきた哲理の一つである。また、五行とは天地間を流行してやまない木・火・土・金・水の五つの元気を意味し、相生と相剋の二つの作用がある。すなわち、

相生．．．木は火を生ず。火は土を生ず。土は金を生ず。金は水を生ず。水は木を生ず。

相剋．．．木は土を剋す。土は水を剋す。水は火を剋す。火は金を剋す。金は木を剋す。

良^{うしろ}の方位は万物の生死するところであり、五行では土気が配当されている。ところが、五行の相剋作用により土気は水気を剋すので、良^{うしろ}の方向の土気によって浮城、小松城の生命線とも言うべき水気を絶たれる恐れがある。このために、土気を剋する木気である天神、雷神、そして祖神である菅原道真公を祀る小松天満宮を良^{うしろ}の方位に建立したわけである。しかしながら、黒岩は小松天満宮社地が何故に梯川の水辺の現在の地に選定されたかについては明言していない。ところで、五行の相生作用によれば水気は木気を生ずるとある。すなわち、木気を生ずる水気のみなき水辺に木気である天神を祀ることは水辺の木気をさらに強め、良^{うしろ}の方向の水辺にある土気を抑える意図があったものと考えられる。この仮説は全国各地に現存する天満宮の多くが川のほとりの水辺に建立されている理由を示唆している。

一方、小松天満宮は京都御所のわきに鎮座している京都北野天満宮の四の一の縮造であると言い伝えられてきたが、小松城天守閣と小松天満宮との距離が、京都御所と北野天満宮との距離2,400mの四分の一に相当する600mとなっていることが宮⁴⁾によって明らかにされた。以上のような理由によって、小松天満宮は小松城天守閣^{うしろ}かな良^{うしろ}の方位線上で距離600mの梯川の水辺に建立されたわけである。したがって、梯川の水と小松天満宮とのかかわりは創建者によって極めて意図的設定されたものである。

3. 梯川の治水と小松天満宮

梯川下流域は前川とそれにつづく旧加賀三湖周辺を含めて典型的な低湿地で、もともと舟を主要な交通手段とし、水郷特有の景観がみられた地域である。これに加えて、いわゆる「水戸づかえ」によるいっ水現象により治水に難渋してきた地域でもある。ここで、「水戸づかえ」とは海岸の漂砂によって安宅の梯川河口が閉塞する現象のことである。

梯川の治水工事は、1579（天正7）年に若林長門が小松城を築く際に行ったのが、その始まりといわれている。その後、江戸から明治にかけて地元民が中心となって小規模な築堤工事などによる防水に力を注いできた。明治以後、石川県は1873（明治6）年に廃止したものの堤防締役を置いた。1885（明治18）年には梯川土功会が結成され、河口閉塞の開削、上流屈曲部の改修が行なわれた。さらに、1887（明治20）年には水利組合条例ができ、水害予防組合を設置し、これを町村管理とした。1897（明治30）年ごろから梯川は県費補助河川となり、1899（明治32）年からその管理を水害予防組合から県費支弁に移し、1900（明治33）年6月には臨時県議会において三か年継続予定で梯川の改修を決議した。その内容は鍋谷川合流点直上流の古河村と淳上川合流点の中海村を中心とした上流の改修と下流の大屈曲部の直線化であった。

ところで、人為的な梯川の流路変更のうちで最大のものは1911（明治44）年11月に着手した改修工事である。この工事の内容は屈曲の著しい下牧と鶴ヶ島の間を開削し、延長4kmの河道区間を1.1kmに短縮し安宅河口に向けて河道の直線化と拡幅、並びに河床勾配の増大をはかったもので1923（大正12）年に竣工した。続いて、安宅河口から白江大橋に至る延長5.97kmの河道整備、堤防補強等のために1930（昭和5）年から工事を開始し、1936（昭和11）年にこれを完成した。なお、この工事には海岸漂砂による河口閉塞を防ぐための安宅の突堤、並びに前川流域の塩害防止のための逆水門の建設が含まれていた。1936（昭和11）年の改修工事終了後から小松天満宮境内は図3においても認めることができるように梯川右岸堤防天端を走る道路から見おろされるような形勢となった。ところで、1926（大正15）年の実測図⁵⁾によれば小松天満宮わきにおける当時の梯川の幅は約35mであったので、1936（昭和11）年の改修工事によってこの約倍に当たる70m程度に拡げられたことになる。この改修工事の際に河床は主として左岸側に拡げられ、右に曲っていた川筋が直線化された。これに伴って、右岸小松天満宮側の土地が幅約6m削り取られると同時に図3に示したような堤防が築かれた。この堤防が築かれる以前の小松天満宮の境内地は緩やかに下って水辺と接しており、小松天満宮はまさに「水天宮」の名にふさわしい美しい景観を呈していたものと思われる。

さらに、1937（昭和12）年には白江大橋から上流側の約6.5kmにわたる河道区間を下流と同様に改修するための工事がはじまり、1943（昭和18）年にこれを完了した。この改修工事を最後として、梯川下流の大部分の流路は固定されたので、以後梯川はその骨格を変えることなく現在に至っている。ところで、梯川水系の過去の水害記録⁵⁾を見て特徴的なことは1943（昭和18）年に改修が完了する以前には梯川本川の堤防が決壊して水害が発生していたのに対して、これ以後の水害はいずれも梯川の支川である鍋谷川、八丁川の堤防決壊または手取川水系に属する農業用水の一つである宮竹用水の流末部である西川排水の氾らんによる梯川右岸堤内地の浸水による水害であったことである。

4. 提言

小松天満宮のわきに現堤防が1936（昭和11）年に築かれるまでは天満宮周辺の環境・景観はその創設以来著しい変化はなかった。すなわち、この堤防が築かれる以前の小松天満宮は三方を水に囲まれ、その境内がごく自然に水辺と接続した緑濃き静寂な鎮守の森の中に鎮座していた。たとえば、大正時代の天満宮付近は当時の子供達にとって自然の楽園であり、祭の日には対岸から渡し舟が出て境内に横付けされていたので、早春の頃、この渡し舟^{てんまがき}に乗って心をこめて書いた「天満書」を持って天神さまにお詣りするのが子供達の楽しみであったという⁵⁾。

小松天満宮は1936（昭和11）年の築堤により梯川の水とのかかわりは阻害されたが、図4に示したように境内のうつろとした社叢は変わることなく創建以来の歴史を今に伝え、名工、山上善右衛門によって造営された社殿、神門や十五重の石塔と融合一体化した森厳な神域を形成している。一方、図3は現在の小松天満宮の森を梯川左岸堤防から眺望した状況を示しているが、この図から小松天満宮の森が梯川の水と良く調和し、美しい景観を醸し出ていることがわかる。

建設省河川局は1971（昭和46）年に小松天満宮の移転を盛り込んだ「梯川水系工事実施基本計画」⁶⁾を公表した。しかしながら、この計画を実行に移す以前に解決すべき種々の問題が派生したので、1984（昭和59）年に小松市によって設置された小松天満宮等専門調査会において個々の問題に関して具体的な調査・検討が行われ、その報告書「加賀小松天満宮と梯川」⁵⁾が1986（昭和61）年に公表された。著者はこの報告書の中で、自らが行った河川関係の調査結果を次の二点に要約している。第一は小松天満宮の社殿・神門等の建築物と融合一体化している歴史的な神域内に現存する動・植物生態系あるいは景観の

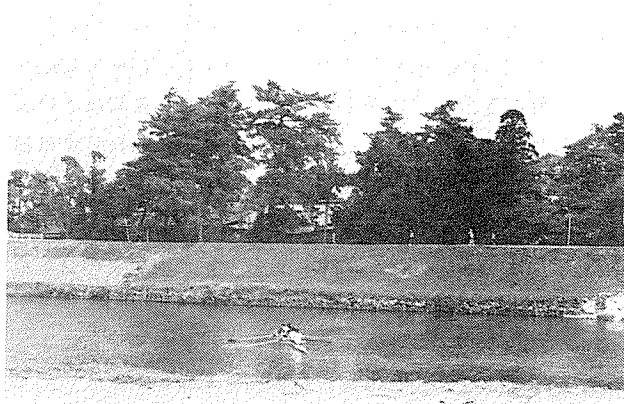


図 3. 小松天満宮の森を梯川左岸堤防から望む
(撮影：中川武夫，1984. 3.29)

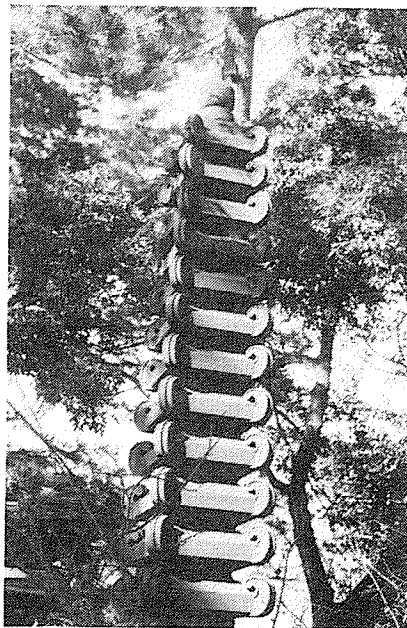


図 4. 小松天満宮、十五重の石塔
(撮影：中川武夫，1984. 3.28)

移転はこれらの質を大幅にそこなうことなしには不可能である。そして、第二は梯川水系の水害対策は小松天満宮の移転をすることなく十分可能である。

すでに指摘したように1943（昭和18）年に完了した改修工事によって小松天満宮境内は梯川本川からの出水に対しては、一応安全となったものの、支川、農業用水、排水路からの出水に対してこの工事は十分な効果を発揮するものではなかった。それどころか、この工事に伴って実施された築堤によって小松天満宮境内から梯川本川への自然排水能力は逆に低下した。このため、著者は小松天満宮の保存と梯川水系の水害対策とが両立するような代替案^{5, 7)}を検討し、これを呈示した。この代替案は梯川水系における水害対策の基本を梯川下流域右岸堤内地を迂回する放水路掘削に置き、ダムおよび遊水池の建設によってこれを補うというものである。なお、この放水路はその起端を鍋谷川合流点直上流部とし、梯川下流域右岸堤内地を迂回し鍋谷川、八丁川および宮竹用水（西川排水）の流れを合わせて前川との合流点付近において右岸側から梯川本川に再び流入するルートを取る。このような放水路掘削は水害対策ばかりでなく、梯川下流域右岸堤内地に慢性的に存在する内水を梯川本川のみならず、新放水路へも排水することを可能とするので、この地域の内水対策にも有効である。また、このような放水路掘削を基本にした水害対策を講ずる場合には小松天満宮の移転はもとより、梯川の現堤防沿いに分布する旧市街地、埋蔵文化財、鎮守の森そして梯川のすぐれた水際環境をそこなう程度を極限することが可能となる。なお、この放水路を実際に施行する際には建設省河川局都市河川室において検討されてきたマイタウン・マイリバー講想⁸⁾を十分に勘案することによって、新しく掘削される放水路周辺を魅力のある親水空間とする着眼が重要である。こうすることによって、梯川下流域右岸堤内地が安全で、親水性に富む潤いのある地域に生まれ変わるのみならず、梯川の水と小松天満宮とのかかわりもより望ましく、かつ永続的なものとなることが期待される。

5. おわりに

梯川の水と小松天満宮とのかかわりは1936（昭和11）年の築堤工事によってかなりの程度阻害されたが、依然として良好な関係にあることが明らかとなった。また、一連の梯川の改修工事が完了した1943（昭和18）年以後、小松天満宮は梯川本川の堤防決壊に伴って浸水したことはなく、いずれも支川、農業用水あるいは排水路からの氾らんによるものであることが確認された。したがって、梯川の水と小松天満宮とのかかわりをより望ましく、永続的なものに止揚していくためにはこれらの支川等からの氾らんを防止するための対策が必要である。これらの目的を達成するためには、小松天満宮の保存と梯川水系の水害対策との両立が可能な著者が提案した代替案^{5, 7)}が有効であることが明らかとなった。

参考文献

- 1) 中川武夫、加賀・梯川水系の歴史、第6回日本土木史研究発表会論文集、土木学会日本土木史研究委員会。171-173、1986（昭和61）年6月。
- 2) 黒岩重人、小松天満宮の創建について——陰陽五行の視点から——、小松天満宮だより、小松天満宮遷座50周年記念号、小松天満宮社務所、1-9、1987（昭和62）年6月5日。
- 3) 北畠直順 監修、『小松天満宮誌』、小松天満宮、57、1982（昭和57）年12月。
- 4) 宮 誠而、小松天満宮の由来に関する調査報告、加南地方史研究、第35号、加南地方史研究会、110-115、1988（昭和63）年。
- 5) 『加賀 小松天満宮と梯川』、小松天満宮等専門調査会、355-461、1986（昭和61）年3月31日。
- 6) 『梯川水系工事実施基本計画』、建設省河川局、1-20、1971（昭和46）年12月。
- 7) Nakagawa, T. A flood alleviation of the Kakehashi basin. Regulated Rivers, 2, 1988 (to be published)。
- 8) 『水辺空間整備事業』マイタウン・マイリバー、建設省河川局都市河川室発行パンフレット、1986（昭和61）年8月。